

# 千観の浄土思想

——『十願発心記』における菩薩行の構造を中心に——

ロバート・F・ローズ

はじめに

『慈覚大師伝』によると、慈覚大師円仁（七九四—八六四）が仁寿元年（八五二）に五台山の念仏三昧の法を比叡山に移して、それを諸の弟子等に伝授したとされている。従来、多くの学者はこの出来事をもって、比叡山における浄土教の始まりと位置づけてきた。円仁以降、浄土教は次第に延暦寺の僧侶のあいだに広まり、やがて日本天台の中心要素の一つとなっていく。特に十世紀半ばごろから、天台宗の教学体系に基づいた比叡山独自の浄土教言説が作られるようになるが、このいわゆる叡山浄土教の形成期で重要な役割を果たしたのが千観（九一八—九八三）である。

『阿弥陀新十疑』の著者である禅瑜（九〇九—九九〇）や『極楽浄土九品往生義』の作者とされる良源（九二二—九八五）などの同時代の僧侶とともに、千観は天台教学の立場から浄土教の言説や儀礼を構築し、その普及に努めた。本稿では千観の浄土思想を、その主著である『十願発心記』を中心に考察してみたい。結論から言うと、そのなかで千観は、仏果を得るためには発心し菩薩行を修することが不可欠であることを強調するが、末世の凡夫には高度な菩薩行は期待されず、そのため凡夫は阿弥陀仏の極楽浄土に往生し、そこで菩薩行を修しなければならないと論じている。

のである。

### 『十願発心記』の構造

多くの平安時代の僧侶と同様に、千観の生涯についてはあまりよく知られていない。佐藤哲英博士の研究によると、千観の別伝は一つもなく、平安時代の『日本往生極楽記』（以下『極楽記』と記す）から江戸時代の『本朝高僧伝』に至る十四種の伝記集のなかに簡単な伝記があるのみである。それらのなかで最古のものは『極楽記』所収の千観伝である。慶滋保胤が『極楽記』を著したのは永観元年（九八三）から寛和元年（九八五）のあいだと考えられているが、これは千観が入寂して直後ないし数年以内のことである。<sup>③</sup>そのため、『極楽記』の千観伝は、この僧について知るうえで大切な資料である。しかし残念なことに、この伝記は極めて簡単なものであるのみならず、その大部分は千観の誕生や臨終にまつわる霊瑞譚で占められている。そのため『極楽記』の記述は、当時の人々が如何に千観をイメージしていたかについて知るためには貴重な資料とはなるが、その生涯の詳細を知るためには、やや不十分であると言わざるを得ない。

『極楽記』には千観の俗姓は橘氏であったと簡略に述べているだけであるが、『尊卑分脈』には千観の父は相模守の橘敏貞であったとされている。『極楽記』には、その母が子供を授かるように観音に祈り、蓮華一茎を得る夢を見て懐妊し、千観を生んだという霊瑞譚が載せられている。後に千観は園城寺に入り運昭の弟子になり、やがて内供奉十禅師に補任された。しかし、『十願発心記』の奥書きには「時に応和二年仲春にその意を略述し、これを後輩に貽す。日本国天台の沙門、釈千観、摂州箕面山観音院においてこれを記す」<sup>④</sup>とあるので、少なくとも応和二年（九六二）には箕面の観音院に隠遁していたようである。数年後には摂津の金龍寺に移り住み、そこで入滅した。

佐藤博士によると、諸目録のなかには千観の著作として二十三部の書名が挙げられているが、そのほとんどが未出

版のもので、出版されているものはわずか六部に過ぎない。<sup>⑤</sup>浄土教関係の主な著作として『十願発心記』と『阿弥陀和讃』とを挙げることができる。『極楽記』には千観が『十願発心記』を著したという記述はないが、「十願を発して群生を導けり」<sup>⑥</sup>と述べている。ここで言う「十願」とは『十願発心記』のなかに見られる十願のことであるが、それが『極楽記』のなかで言及されていることは、千観の十願が当時よく知られていたことを示している。先に見たように『十願発心記』の奥書きによると、この書は応和二年に箕面の観音院で書かれたようである。また千観は五十巻にも及ぶ『法華三宗相對抄』も著わしたが、そのうちの何巻は散失し、約三十巻のみが現存するようである。それは『法華経』についての天台・三論・法相の三種の注釈文を抄出相對したものであるが、残念ながら未だ出版されていない。佐藤博士によれば第四巻の初めに、この巻が応和二年に箕面の観音院で記されたところなので、その成立は『十願発心記』とほぼ同時代であろう。<sup>⑦</sup>

次に『十願発心記』の内容であるが、この書物は(一)述意、(二)釈文、(三)料簡の三つの部分より構成されている。まず最初に述意は『十願発心記』全体の序論に当たる部分であるが、それは九の問答により展開されている。これらの問答を通じて、千観は仏果を得るためには、凡夫であっても発心し、誓願を立てて菩薩行を修することが不可欠であると力説している。次の釈文では、千観自作の十箇条よりなる菩薩の誓願(十願)を挙げ、それらについて自ら注釈を施している。最後に料簡では、十願について問答を設けて、それぞれの問題点について論じている。

### 『十願発心記』と菩薩の発心

千観は『十願発心記』の述意の最初の問答のなかで、天台教学の基本的立場を継承し、一切衆生は仏性を有し、悉く成仏すると明確に論じている。

問う、十界の衆生は稟性各異なり。何ぞ必ずしも発心して、その仏果を求めんや。〔十界衆生は一は地獄界、

二は餓鬼界、三は畜生界、四は修羅界、五は人界、六は天界、七は声聞界、八は縁覺界、九は菩薩界、十は仏界」

答う、十界は異なりと雖も仏性これ一なり。一切衆生煩惱の力によりて、しばらく、生死に輪環すと雖も、仏性一なる故に終に同一仏界に帰す。(中略) 故に、今発心して皆仏界を求む。<sup>⑧</sup>

周知のように、天台教学では法界を地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人・天・声聞・縁覺・菩薩・仏の十界に分けられている。これら十界の衆生は各々の業によって、異なる形態や性格を持って存在するが、ここではすべて同一に仏性を有するため、終には仏界に帰して仏果を得ると説かれている。

しかし仏教のすべての宗派・学派が、一切衆生の成仏を認めるわけではない。特に法相宗では三乘眞実の立場から五姓各別説を主張し、仏果に至ることのできない衆生の存在を認めている。法相宗によると衆性は法爾として(つまり先天的に)菩薩定姓・獨覺定姓・声聞定姓・不定種姓・無姓有情の五種姓に分けられている。『十願発心記』のなかで千観は、五種姓を菩薩乘・声聞乘・縁覺乘・不定乘・天人乗と表現している。)この五種類の衆生のなか、菩薩定姓、獨覺定姓、声聞定姓の衆性は、それぞれ仏果、獨覺果、声聞果に至ると考えられているが、不定種姓は仏果、獨覺果、声聞果のいずれにも至る可能性を持つとされる。さらに無姓有情(一闍提)は涅槃を証得する可能性は一切持たず、永遠に流転し続けるとされている。つまり、法相の五姓各別説によると、菩薩定姓と不定種姓の一部の衆生のみが成仏できると考えられているのである。

以上のような法相宗の見解は、すべての衆性が成仏すると説く天台宗の一乘思想に相反するものである。そのため、千観は天台宗の立場から五姓各別説を厳しく批判している。千観によると、五姓格別説は『瑜伽論』などに基づいているが、『瑜伽論』は方等部に属す論書であり、仏の眞実の立場を顕わすものではない。天台宗の教相判釈では、釈尊が説いた經典を、その説法の順序に従って華嚴時・鹿苑時・方等時・般若時・法華涅槃時に配列しているが、最初

の四時は方便を帯びた教えであり、最後の法華涅槃時に説かれた『法華經』に至って、初めて眞實の教えが示されたと考えられている。そのため方等部に属する『瑜伽論』に基づく五姓各別説は方便の教えであって、眞實の教えとは認め難いものである。つまり仏の眞實の教えは『瑜伽論』ではなく、『法華經』に見られるが、その眞實の教えとは、千観が「今一切衆生皆成仏道というは、すなわち、これ法花涅槃の眞實大乘の意なり」と表現しているように、一切の衆生が成仏するという一乗の教えに他ならないである。このように千観は『法華經』を拠り所とした天台宗の一乗思想に基づいて、法相宗の五姓格別説を退けている。

以上のように千観は『十願発心記』の冒頭で、すべての衆生は仏性を有し、皆成仏することを確認している。しかし、ここで次の疑問が提示される。それは衆生は仏性を有するため、なにもせずに成仏するのを待てばよいのではないか―つまり発心や修行がなくても成仏できるのではないか―というものである。これに対して千観は、衆生は仏性を有するが、成仏するためには必ず発心して修行することが求められていると答えている。さらに、仏性と発心修行との関係を次のように説明している。

木の中に火あれども、縁に遇わざれば、終に発すること能わず、必ず鏝櫨の縁を待ち、まさに火起こるを得る。

衆生の仏性もまたかくのごとし。本来これありと雖も、必ず発心修行の縁に遇いて仏種まさに起る。故に『法華經』にいわく、仏種は縁によりて起る、この故に一乗を説く、と。<sup>⑩</sup>

つまり発心修行の縁に遇って初めて、それまで衆生のなかに先天的に潜んでいた仏種が発動し、成仏への道を歩み始めることができるのである。

大乘仏教では仏果に至るためには、六波羅蜜（布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧）を中心とした菩薩行を修しなければならぬとされている。この菩薩行は菩提心を発すること、つまり発心することから始まるが、菩薩は発心する際に、それぞれ成仏するための条件を示す誓願を立てる。このように発心し誓願を立てることにより、菩薩とし

ての自覚を持ち、仏果に向かつての歩みをつづける決意を表明するのである。經典には菩薩行について詳しい記述が多く見られるが、そこには菩薩が自己の悟りのためだけでなく、一切衆生の解脱を目的とする徹底した利他行を行わなければならない、と説かれている。当然ながら天台教学でも菩薩の利他行を重視し、仏果を得るためには「上に菩提を求める」とともに、「下に衆生を（教）化」しなければならないことが強調されている。<sup>⑪</sup>

しかし多くの人々は、自らは底下の凡夫であり、煩惱の障に厚く覆われているため、発心して菩薩行を修することは到底不可能であると反論する。発心・修行は菩薩に要求される卓越した志しと深い精神性を身に付けた者には可能であるが、それ以外の者には起こすことはできない。これは凡夫には菩薩行に踏み出すことは不可能であるという悲観的な見解であるが、千観は「ただ欲界の人の中のみ、その発心の器に堪えたり」と説いて、この見解を厳しく批判している。そして、さらに「この時も発心せずんば、さらにまたいずれの時をかせんや」と述べ、この機会を逃せば、いつ発心する機会に恵まれるか分からないから、ただちに発心すべきであると強調する。千観によると、釈尊や過去の無量の諸仏も、かつては皆凡夫であつた。しかし釈尊や諸仏は発心して仏となつたが、自分は発心することを怠つて今日まで生死に流転し続けている。このように懺悔の念を告白した千観は最後に「もし惑業の身を嫌い、大心を発すること能わずんば、世々生々解脱を期し難し。悲しむべし悲しむべし、愚の中の愚なり」と述べ、惑業の身であつても、発心するべきであることを力説している。

さらに千観は、次のような在家信者の疑問にも答えている。

問う、国家を出離し鬚髪を剃除し、身を山林に遁がれ跡を煙霞に暗くす。かくの如きの輩、まさにこの願を發すべし。もし白衣の居士に至つては、王事これを勤め妻子これを営む。寔に心を仏果に帰すと雖も、未だ務みを世路に抛たず、今この身をもつてこの願を發さば、所言と所行とあに相違せざらんや。すなわち三宝を詐り無間を期すべし。<sup>⑫</sup>

つまり、出家した僧尼にとって発心することは容易であるが、朝廷に使え妻子を持つ白衣の居士にとっては、発心して厳しい菩薩行を修することは甚だ困難である。さらにまた、在家の身で発心しても、もし菩薩にふさわしい利他行を行うことができれば、誓と行為が相反して三宝を詐ることになり、無間地獄に落ちる結果となるのではないか。これが問いの内容である。

このような見解に千観は、在家であつても出家者と同様に発心して菩薩行を修するよう努めなければならないと主張する。千観によると、如来には比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の四種の弟子がいるが、前の二は出家の弟子であつても、後の二は在家の弟子である。在家・出家という点で両者は異なるが、発心が要求されている点ではみな同じである。しかし、それでも菩薩行に踏み切ること躊躇する在家信者のために、千観は次のようにも論じている。発心する心には小乗心と大乘心の二種があるが、小乗心を起こせば必ず出家すべきである。しかし「もし大乘の心を発する者は必ずしも出家せず、大悲を先となし衆生を化すが故に」と説き、大乘の教えに帰依するものは、必ずしも出家する必要はないと論じている。また菩薩の誓願を立てたとしても、とうてい在家の身ではそれを全うすることはできないという見解にたいして、千観は「誰がいわん、また必ず今生にこの願を遂ぐべし。我ただ相催して先ず発願すべし。今生に必ずこれを遂ぐべしとはいわず」と説明し、菩薩の誓願を立てたとしても、それを今生に完全に成就する必要はないことを強調している。なぜかといえば、「現身にこれ（『菩薩の大願』）を遂げずと雖も、ただ立願の力によつて遙かに菩提の因を結」<sup>⑮</sup>ぶからである。重要なことは、今発心することである。それは「大心を発する人は、身口意の中に諸有の所作は、皆これ菩提の因」<sup>⑯</sup>となるからである。

しかし、菩薩の誓願は未来世に成就するものであるといわれても、菩薩行の厳しい内容のため発心することに躊躇するものもある。つまり、必要があれば菩薩は乞はれるまま自己の手足・骨髄・頭目・国域・妻子までも施さなければならぬが、このような苦行を無量百千億劫ものあいだ行つて、始めて菩提の果を得ることができるのである。<sup>⑰</sup>

のような困難極まる行を修することは不可能である、と彼等は落胆する。

このような態度にたいして、千観は強い口調で反論する。

ああいづくんぞ錯まれるかな。たとい菩薩の苦行において恐怖を生じて、その心を発さずとも、更に他の悪業力によって、三惡道に墮せば、無辺劫の中に極大の苦を受けん。(中略)菩薩の苦行に至つては、一たび生命を捨つるの時、万億劫の生死海を超越する。<sup>22)</sup>

菩薩行の困難を恐れて発心もせず、迷いの生活を続づけるのであれば、必ず悪業を積み三惡道に墮することになるであろう。そうすれば、かえつて無辺劫のあいだ耐え難い苦を受けることになる。しかし菩薩が生命を捨てて苦行を行えば、万億劫の生死海を超越することができる。そのため、真に苦から逃れるためには、発心して菩薩行に従事すべきである。

千観は、『十願発心記』の述意の最後に結論として次のように述べている。

まさに今、日景頻りに傾きて年光空しく移らん。一生半かは過ぎ遺命いくばくならず。仏教遇い難く人身希有なり。もし空しくこの生を過ぎん者は、定んで後悔するも及ぶべからず、努力努力、庶わくば時を失することなかれ。それ出家はこれ先哲の跡、しかるに人多く堪えず。陰遁はまた古賢の風、遂ぐる者猶少なし。この発願に至りては誰人かこれに堪えざらんや。発願の大意略してここにあり。<sup>23)</sup>

要するに、すべての人が出家できるとは限らないが、在家の人でも発心することはできる。出家でも在家でも、仏弟子であればみな発心して菩薩の誓願を起こし、菩薩行を修さなければならぬのである。

### 菩薩行と浄土往生

以上のように千観は、流転を超えるためには出家・在家を問わず、みな発心して誓願を起こし、菩薩行に努めなけ



ればならないことを論じている。そこで『十願発心記』の釈文のなかで、自作の十願を示して、菩提を求めて菩薩行に身を投じることを誓っている。ちなみに千観は「菩薩みな二種の大願あり。一はこれ惣願、いわゆる四弘誓願・五大願なり。二はこれ別願、いわく薬師如来の十二願、弥陀如来の四十八大願のごときなり。今、十大願というは、すなわちこれ別願ならくのみ」と述べ、ここで挙げられている十願は個々の菩薩が起す別願であることを確認している。その十願の内容であるが、一言でいうと、それは菩薩行を確実に行うために、まず阿弥陀仏の極樂世界に往生し、往生の後に速やかに娑婆世界にもどり衆生済度の実践を行うというものである。しかし、ここで一つの問いが提示される。つまり、菩薩とは大悲心をもつて衆生を済度することを業とするから、常に三界内に生じて苦悩する衆生を救うべきである。ではなぜ、三界を超えた浄土に往生することを誓うのであろうか。この疑問に対して、千観は天台智顗の著作とされている『浄土十疑論』を引用しながら、次のように答える。つまり『浄土十疑論』によると、菩薩には二種あるが、すでに久しく修行を積み、無生法忍を得た菩薩は三界に生じて自在に衆生を化すことができる。しかし新發意の菩薩は未だ無生法忍を得ていないために、思うように衆生を救うことはできない。そこで千観は新たに發心した凡夫（＝新發意の菩薩）は専ら阿弥陀仏を念じて、浄土に往生し、そこで無生法忍を成就して、三界にもどつて苦悩する衆生を済度し、広く仏事を施すべきである、と主張している。<sup>⑤</sup>

これに関連した疑問として、宇宙には無数の仏の浄土が存在するが、なぜ特に阿弥陀仏の浄土に往生すべきであらうか、というものもある。これは中国や日本における浄土教の歴史のなかで常に論じられてきた問題であつた。『十願発心記』では『浄土十疑論』の説を引用して、この疑問にも答えている。

問う、諸仏すでに多し、何ぞ必ずしも弥陀を念ぜんや。

答う、『十疑』の中に決していわく、凡夫無智にして、敢えて自ら専ら仏語を用うるが故に、偏えに弥陀を念ず。いわゆる我が釈尊処にただ勤めて偏えに弥陀を念じ、求めて西方に生ぜしむ。また弥陀仏に別に四十八の

大願あつて、衆生を接引したまう。もし念ずることあれば機感相応して、決定して生ずることを得。また弥陀仏はこの世界の衆生と偏えに因縁があるが故に。云云<sup>26</sup>

ここで引かれている『浄土十疑論』には、(一) 釈尊が種々の經典で衆生に偏に阿弥陀仏を念ずるよう進めているから、(二) 阿弥陀仏には四十八の大願があつて、衆生を接引するから、(三) 阿弥陀仏は偏にこの娑婆世界と深い因縁があるから、という三つの理由を挙げて、阿弥陀仏の浄土に往生することを進めている。

このように菩薩行を確実に修するため、千観は阿弥陀仏の浄土に往生することを求めている。その意味で、浄土往生を誓う第一願が十願のなかで最も重要な位置にあるといえよう。この願の前半の部分で千観は臨終の時に阿弥陀仏の来迎を蒙つて、上品の蓮台に乗つて浄土に往生することを誓っている。

第一の願にいわく、今生に普ねく一代の教を搜りて具さに如来権実の道を知り、念々に漸く六根の罪垢を浄め、現身に必ず障外の境を縁じ、臨終の時身心安樂にして、かの弥陀の来迎を蒙つて、上品の蓮台に往生せん。<sup>27</sup>

ここではまず釈尊一代の教えを研究し、権実の道を見極めると誓っているが、これは千観が自ら語っているように、行は教より起こり、証は行より成ずるため、菩薩の大事事を起そうとするものは、最初に仏教の趣旨を明らかに知る必要があるからである。<sup>28</sup>これに関連して『十願発心記』では、天台の四教・五時の教判を詳細に紹介され、天台教学の立場から如来の権実の教を明確に区別することに努められている。

またこの願で千観は「念々に漸く六根の罪垢を浄め、現身に必ず障外の境を縁じ」と述べるが、これは六根の清浄を得て、浄土（＝障外の境）を観ずることを日常の行とすること語っているものである。そもそもこの行法は天台の法華懺法に基づいている。この法華懺法は『観普賢経』により大成された行法であり、その方法は智顗撰の『法華三昧懺儀』に詳しく説かれているが、それは期間を三七日に限って、六根より生じた一切の罪悪が畢竟清浄になるようにと懺悔し、『法華経』の読誦と坐禪を交互に繰り返し、その結果一切法が空であり、罪業も不可得であることに通

達するものである。さらにこの行法が成就すれば、六牙の象に乗った普賢菩薩ならびに十方の諸仏が現前するとも述べられている。この記述を千観は『十願発心記』のなかで次のように簡略に要約している。

『普賢観經』に准ずるに、昼夜六時にその三業を励げまし、身に諸仏を礼し、口に大乘を転じ、意に実相を思う。かくのごとく心を大乘に繋けて、一七日より三七日乃至七七日に至る、乃至一生二生三生、一心に六根の懺法を修行して、この時罪垢漸く除き、六根を自ら浄め、眼に漸く障外の色を見る。耳に漸く障外のを聞く、乃至意に漸く障外の方法を知る。<sup>⑧</sup>

千観の行法は、この法華懺法を応用して考案されたものと考えられるが、その具体的方法は、残念ながらこれ以上詳しくは示されていない。しかし、それは諸仏を礼拝し、口に大乘經典を称し、実相を観察することで一切法の空不可得たることに通達することで、無始よりの悪業を懺悔し、六根の清浄を得、それによって阿弥陀仏とその浄土の諸相を観想することを期待したものであったと思われる。このような行を通じて、臨終の時に心身安楽を得て、阿弥陀仏の来迎を蒙って、上品の位で浄土に往生することを得ると千観は述べている。

千観は臨終時に心の安楽を得ることを重視している。彼によると、臨終の時、人には(一)境界愛、(二)自昧愛、(三)当生愛という三種の愛が必ず起るため身心の安楽を得ることは極めて困難である。最初の境界愛とは、病氣などで必ず死に至るといふ兆しが現われたときに起る愛着の念で、妻子・眷属・屋宅などに対する深い執着のことである。しかし境界愛よりさらに深いのは次の自昧愛である。命が終わらんとするとき、先の妻子などに対する愛着は消え去るが、それに代わって身体や生命にたいする深い愛着が沸き上がる。これが自昧愛である。そして最後の当生愛とは、まさに死ぬ瞬間に起こるものであるが、それは当有(来世における生)にたいする執着であり、もともと根源的な愛着である。これらの愛に動揺して、臨終の人々は身心の安楽を得ることができず、念仏に専念して浄土に往生することもできなくなる。しかし常に諸法の無常を観じ、自身の過患を厭い念仏に励む人々は、臨終のときこの三種の愛を

起こさず、しずかに念仏を行い往生を遂げることができるとされている。さらに尋常の時にすでに発心して菩薩の誓願を立てている者は、愛欲が深重であつても、その誓願の力によつて臨終に三愛を起すことはない。このように、深い執着の心の衆生も臨終の念仏によつて、浄土に往生することができると千観は付け加えている。<sup>③</sup>

以上のように千観は、第一願の前半で臨終に上品の蓮台に乗つて浄土に往生することを誓っているが、この願の後半では、自分だけが浄土に往生するのではなく、一切の衆生も同じく往生できるように手助けをするとも宣言している。つまり菩薩の利他行として、すべての衆生が自分と共に浄土に生まれるよう努めるというのである。その方法は極めて興味深いものであるが、千観はそれを第一願の後半で具体的に示している。

あにただ我れ一人この事あらんや。普ねく法界の一切衆生の命終の時に臨み、七日以前に預め時至ることを知りて、心に顛倒を離れ、心は正念に住して善知識の教に遇い、十念を称して身心に諸の苦痛なく、同じく弥陀の浄土に生ぜしめん。<sup>④</sup>

ここでは法界のすべての衆生が臨終にいたるとき、その死の時刻をあらかじめ知らせると誓われている。なぜそのように誓われているかというと、死に臨む人が必ず善知識に遇い、十念を称して浄土に往生できるようにさせるためである。これは『観無量寿経』の下品下生の教説に基づいたことは言うまでもない。『十願発心記』には九品往生の文が（多少の省略などがあるが）詳しく引用されている。ここで引かれている下品下生の文は次の通りである。

或いは衆生あつて不善の業、五逆十惡を作り、諸の不善を具す。この人臨終に善知識に遇う。種々に安慰してために妙法を説き、教えて念仏せしむ。かの人苦に逼められて念仏する能わず。善友告げていわく、汝もし念ずること能わざれば、まさに無量寿仏を称すべし。かくの如く至心に声をして絶えさらしむ、十念を具足して南无阿弥陀仏を称すべし。仏の名を称うるが故に、念々の中において八十億劫生死の罪を除き、命終の後、金蓮華の猶し日輪のごとくして、その人の前に住するを見る。一念の頃のごとく、すなわち蓮華の中に往生を得。（以下省

このように『観経』では五逆十惡の衆生さえも、臨終に十念を具足して南無阿弥陀仏を称すれば往生を遂げると約束されているが、この約束を実現するために、千観はこの願を立てているのである。つまり生涯を通じて惡業を行ってきた衆生が、臨終時に自發的に念仏を称するとは考えにくい。そのため千観は、すべての衆生が死の時刻を知り、その自覺をもって善知識に教えを求め、その指導にしたがい南無阿弥陀仏を称するようにさせると誓っているのである。このように、『観経』で説かれる臨終の救済を一切衆生の上に実現させることが、菩薩の利他行であると千観は確信しているのである。

### 浄土における菩薩の利他行

以上のように千観は第一願で、一切の衆生とともに浄土に往生することを誓っている。しかし浄土に往生することが最終目的ではない。むしろそれは菩薩行の第一歩として位置付けられている。つまり千観の理解からすれば、浄土往生は菩薩行を自在に行うためのものである。そこで彼は残りの九願のなかで、往生後の行を詳しく記している。たとえば第二願のなかで、浄土に往生した後、速かに娑婆世界にもどり、有縁の衆生を済度して、慈尊（弥勒菩薩）が世に出るまで仏法を護持して、さらに弥勒説法を聞き、菩提を記を得て成仏すると誓っている。

第二願にいわく、願わくは我れ浄土に往生の後、速かに娑婆に還りて本願力をもつて、先ず有縁の衆生を度し、弘むるに釈尊の遺法をもつてし、まさに慈尊の出世に継ぎ、彼の初会の中において最初に菩提の記を受けん。あただこの一期の事のみならんや。惣じて釈尊、十方世界成仏の処処に未來際を尽くし、法界際を窮め皆その教法を弘め、後仏の出世に継がしめん。<sup>(3)</sup>

このように(一)往生後に速かに娑婆世界にもどり、有縁の衆生を済度することと、(二)五十六億七千万年後の遠い未來に

弥勒菩薩が出現するまで、釈尊の遺法を護持ことと、(三)同様に十方世界で教法を弘め、仏が出世するまで仏法を護ることなどが、この第二願の中心的内容となっている。さらに往生後に娑婆世界にもどり、生前特に深い因縁を持った衆生を済度することは、第八願に誓われている。

第八願にいわく、我れ無始生死よりこのかた、乃至菩提道場まで父母・六親・朋友・知識・奴婢・僕従・惣じて我が経歴し来るところの十方世界の一切衆生は、もし我が名を聞き、我が身を見、我を讀め、我を毀る。凡そかの見聞触知の一切衆生、我れみな拔濟し引接して、尽く我が成仏の国に生ぜしめん。その引誓の本願、浄土の莊嚴、みな、弥陀の極樂世界のごとくならん<sup>④</sup>。

このように千観はすべての有縁の衆生を拔濟することを宣言している。しかし千観の利他の願は、有縁の衆生に限られず、一切衆生に向けられていることは当然である。たとえば第九願には十方衆生の不請の友となり解脱へと導くことを約束している。同様に第十願でも「凡そ尽虚空法界の一切の有情、我れみなその身を離れず、(中略)常に如来の教をもつて、その心を引導し漸くもつて遂に一乗の道を究竟せしめん」と述べ、さらに続づいて「もし衆生界、尽きずんば我また正覚を取らず。大悲闡提、觀世音のごとくならん」と結んでいる。言うまでもなく大悲闡提とは、『楞伽經』などに説かれる菩薩の一種のことであるが、一切衆生が涅槃するまで減度を取らないと誓い、衆生が無量ですべて涅槃することはないため、自らもついに涅槃することのない菩薩のことである。つまり千観は大悲闡提や觀世音菩薩のように正覚を取らず、永遠に衆生済度のために働くことを願っているのである。

第四願から第七願までの願のなかで、千観は法界の衆生を済度する方法を具体的に示している。第四願では十方世界の諸仏の滅後に、その国に行つて仏法が滅しないようにすると述べ、第五願では十方恒沙の無仏の世界に往きて、「仏教の灯をかかげて、愚暗の衆生を照らし、邪見の荆を抜いて正見の中に入らしめん<sup>⑤</sup>」と宣言している。さらに第六願と第七願では、十方世界の衆生が現に受けている諸苦を除くことを誓っている。第六願では「十方世界の三災劫

の中に我能くその中に往きて、長者の身をもつて、その飢渴の苦を救い、大医王身を現じて、その疫疾の苦を療し、慈悲根の力をもつて、刀兵の愼を除かん<sup>③⑧</sup>と述べている。ここでいう三災とは刀・疫・飢（戦争・疫病・飢饉）の災害のことであるが、千観はこの三種の災害に遭遇している世界にゆき、それらの世界で苦悩する衆生を救済すると誓っている。具体的にいうと、衆生が飢饉で苦しんでいる世界には大富豪として現われ人々を飢えから救い、疫病で苦しんでいる世界には名医として現われ病氣から救い、また戦争で苦しんでいる世界では慈悲を説き、兵隊の怒りと憎しみを静め、平和をもたらずと約束している。そして最後には「凡そそれ弘誓の本願は、葉師如来のごとくならん<sup>③⑨</sup>」と誓っている。さらに第七願では「十方世界の三悪道の中、我れよくその中に往きて、大悲力をもつて、諸の衆生に代りて種々の苦を受け、神通力をもつて、よくかの種々の苦を救い、智慧の力をもつて、皆一乗に入らしめん<sup>④⑩</sup>」と宣言し、続いて三悪道の衆生のみならず人・天・三乗の苦も救うとも述べ、最後には「大悲の威神惣して地蔵尊に同じからん<sup>④⑪</sup>」と結んでいる。

## 結 論

『十願発心記』の最後に、千観は次のような興味深い言葉を記している。

我れ今この十願を立て、遙かに菩提の因を結ぶ。もし命終に臨まば、この願文をもつて、右の掌に握りてその命を終わるべし。願わくば命終の後、順次の生の中にこの誓願の書変じて如意珠となりて、生々世々在々処々、我が右の掌中に常にこの宝珠あらん。この宝珠の力によりて、普く一切衆生のために、よく無辺種々の仏事を作し、もし貧乏の者のため、楽に随いて種々の宝を雨ふらし、もし病患の者のためには病に随って、まさに種々の薬を出だし、もしは短命の者、もしは根欠の者、もしは盲聾の者、もしは瘡癰の者、もしは心狂の者、もしは貪欲の者、もしは瞋恚の者、もしは邪見の者、凡そかの身心の一切の憂患は、この妙薬に触れて、これを療治せずと

いうことなからん。先ずその世間の苦を除き、然して後にまさに出世の心を発して、かの根機任たる所の力に随つて、三乗の道より一切智地に至らん。あにただこの利益のみあらんや。またこの宝珠つねに種々の色光を放ちて、普く无边の仏刹を照らし、衆生のこの光りに触るるもの、利益を得んことまた前のごとくならん。また光りの中に声ありて、常に我れこの十願の文を説かん。衆生はこの声を聞かんものは、利益を得んこと前のごとし。また宝珠の中より常に微妙の香を出ださん。牛頭栴檀もこれに比すること能わず。衆生のこの香を聞くもの利益を得んことまた前のごとし。我れこの如意宝珠をもつて、それよくかくのごとく普く无边の仏刹の中において、常に六塵に触れて諸仏の事を作さん。<sup>④</sup>

ここで千観は、この十願を記した文を右手に握つて臨終を迎えると述べているが、臨終後にはその十願を書いた文書がすべての願いを満たす如意珠に変化して、生々世々在々処々常に千観の掌中にあり、一切衆生の苦を除き仏事をなすであろうと予言している。さらにその如意珠からは光り・声・香が放たれ、それらも衆生を利益するであろうと説かれている。このように千観は十願の願文が如意珠と変換し、その力によって菩薩の利他行を行うと誓っている。つまり衆生済度の願いが、如意珠という具体的な形をとって自在に働くことを誓っているのである。

このように千観は『十願発心記』のなかで自作の十願を示し、菩薩行を修することを表明している。そしてその内容は、すでに見てきたように、浄土に往生し、十方世界の衆生の苦悩を除くための菩薩の利他行を行い、仏果を獲得するといふものである。このように叡山浄土教の初期の時代には、徐々に天台教学に基づいた浄土教言説が構築され、九八五年には源信の『往生要集』によって集大成されるにいたった。このように千観は自らも浄土往生の願を作成し、他にも浄土の教えに帰依するよう進め、日本における浄土教の発展に大きく貢献したのである。

## 注

① 千観の生涯と著作については佐藤哲英、「千観内供の研究」(『宗学院論輯』第十卷、昭和十四年、一一六五頁)によった。



② 『極楽記』の千観伝は井上光貞・大曾根章介編『往生伝・法華験記』（日本思想体系七、岩波書店、一九七四）二九—三〇頁に収められている。

③ 『極楽記』の成立年代については井上光貞・大曾根章介編『往生伝・法華験記』、七二—七三頁参照。

④ 佐藤哲英、『叡山浄土教の研究』、(百華苑、一九七九)、資料編、二二〇b頁。

⑤ 千観の著作については佐藤哲英、『千観内供の研究』、三〇—六一参照。

⑥ 井上光貞・大曾根章介編、『往生伝・法華験記』、二九頁。

⑦ 佐藤哲英、『千観内供の研究』、三三—六頁。

⑧ 佐藤哲英、『叡山浄土教の研究』、資料編、一八九a頁。

⑨ 佐藤哲英、『叡山浄土教の研究』、資料編、一八九b頁。

⑩ 佐藤哲英、『叡山浄土教の研究』、資料編、一九〇a頁。

⑪ 「上求菩提、下化衆生」という表現は、たとえば『往生要集』（『大正藏經』八四卷四八c頁）にあるが、その原形は『摩訶止観』（『大正藏經』四六卷六a頁）に見られる。

⑫ 佐藤哲英、『叡山浄土教の研究』、資料編、一九一a頁。

⑬ 佐藤哲英、『叡山浄土教の研究』、資料編、一九一b頁。

⑭ 佐藤哲英、『叡山浄土教の研究』、資料編、一九一b頁。

⑮ 佐藤哲英、『叡山浄土教の研究』、資料編、一九一b—一九二a頁。

⑯ 佐藤哲英、『叡山浄土教の研究』、資料編、一九二a頁。

⑰ 佐藤哲英、『叡山浄土教の研究』、資料編、一九二b頁。

⑱ 佐藤哲英、『叡山浄土教の研究』、資料編、一九四b頁。

⑲ 佐藤哲英、『叡山浄土教の研究』、資料編、一九三a頁。

⑳ この一節は『法華経』の提婆達多品の次の文に依っている。「我れ過去無量劫のなかにおいて、法華経を求めしに懈倦あることなし。（中略）六波羅蜜を満足せんと欲するため、布施を勤行せしに、像馬七珍、国城妻子、奴婢僕従、頭目髓腦、身肉手足を惜惜することなく、軀命を惜まざりき。」『大正藏經』九卷三四b頁参照。

